

病害虫の発生概況

[病害発生概況]

1. 稲・麦

イネいもち病に関しては早期水稲および普通期水稲を通じて葉いもちが多発したのが特徴である。佐賀県で7月26日に葉いもちおよび穂いもち対象に、大分県で7月27日に穂いもち対象に、熊本県で8月10日に穂いもち対象の注意報がそれぞれ発表された。また、注意報は発表されていないが鹿児島県では7月下旬の発生圃場率が81%となり、平年の41%と比較し多発生となった。稲作期間前半の気象条件をみると4月から5月は平年に比べ降雨が少なく、感染好適条件の出現が5月下旬からと平年より遅く、平坦地では連続して出現しなかった。しかし、梅雨入り後は一転して降雨が続き、日照時間も少なくいもち病菌の感染・増殖に好適となった。6月下旬から7月上旬にかけて **BLASTAM**（葉いもち発生予測モデル）による感染好適条件が各地で出現した。この結果、早期水稲では6月下旬から普通期水稲では7月上旬から葉いもちの発生を確認し、その後止め葉を含む上位3葉まで病斑が進展した圃場が多くあった。この原因は感受性品種の栽培拡大、種子消毒が不十分で苗いもちによる持ち込みが多かった、移植時の降雨で箱施薬剤の流亡が一部地域であったこと等が重なり多発生となったと推察される。さらに、佐賀県西北部の山麓地帯でカルプロパミド粒剤の効果が低い事例が報告され、原因を究明したところ同薬剤に対する感受性が低下したいもち病菌が我が国で初めて確認された。

梅雨明け後からは高温少雨傾向が続いたが、気温の日較差が大きい中山間地では稲に露が付きやすい状態が続き、いもち病菌の感染可能な葉面ぬれ時間が確保された。その結果、降雨がなくても葉いもちの上位進展がみられるいわゆる「日照りいもち」の状態となった。このため、各地で徹底した防除がなされた。加えて、出穂期から穂揃期の穂いもち感染適期に降雨に合わなかったことから穂いもちの発生は平年並みに留まった。

紋枯病については梅雨明け後の高温により温度条件は病原菌に好適であったが、降水量が少なく株間湿度が低く推移したため、鹿児島県の普通期水稲でやや多発生になった以外は少発生～平年並みであった。

その他の病害として宮崎県の中北部の中山間地を中心にごま葉枯病が9月上旬以降に急激に進展し、多発圃場が散見された。梅雨明け以後の異常高温による肥料切れが原因と推察される。

鹿児島県で黄萎病・萎黄病のウイルス病が広がり、早期水稲では発生圃場率が37%と高くなった。発生程度の高い株では異常分げつや穂の出すくみ症状が認められ、このような圃場では減収となった。箱施用に用いる殺虫剤がツマグロヨコバイに効果のないものになってきて

いるためウイルス媒介虫の発生密度が高まっていることが予想される。

コムギでは例年問題となる赤かび病、うどんこ病の発生は全体に少なく、赤さび病が福岡県でやや多発したが本病に対する薬剤防除はほとんど行われていない。オオムギでは斑葉病および網斑病が福岡県、佐賀県、大分県でやや多発した。これら2病害は種子伝染性であり、種子消毒剤により同時防除が可能である。

2. 野菜・畑作物

イチゴでは疫病が福岡県で近年増加傾向にあり、「とよのか」以外の品種導入や高設栽培の普及に伴って増加している。高設栽培では厳寒期の2月に発生した事例もあり農家は炭疽病と混同している場合も多く、実際は既にかかり発生している可能性もある。本病はいったん発生すると耕種的防除しか対策がなく、甚大な被害を被ることが多いので今後の発生動向には注意が必要である。また、大分県で育苗期の7月下旬から8月にかけて炭疽病が多発し、苗不足を生じた。圃場により発生に違いが認められたものの2種類の炭疽病菌による炭疽病が確認された。梅雨期の6月3～4半旬および7月2～4半旬にかけての集中的な降雨により、伝染したものと考えられる。また、萎黄病が福岡県、佐賀県、熊本県で多発した。

ナスではすすかび病が福岡、佐賀、長崎県で多発した。佐賀県では平年より早い10月下旬から発生がみられ、多くの圃場でまん延し、12月25日に注意報を発表したが、防除効果が上がらず、落葉するなど被害が著しかった。初期防除の不徹底のほかアゾキシストロビンに対する耐性菌の発生および **DMI** 剤に対する感受性の低下が原因と推察される。

トマトでは黄化葉巻病 (**TYLCV**) の発生が拡大し、既発生地（福岡、佐賀、熊本、長崎県）では定着しつつある。本病はコナジラミで伝播し、発病した放置苗や雑草等が伝染源であることから家庭菜園も含めた地域ぐるみの防除対策が必要である。また、疫病が秋期の高温と冬期の天候不順に伴い発病が助長され福岡、佐賀、熊本、鹿児島県で多発した。灰色かび病、葉かび病は全般的には平年並みの発生であった。また、黄化えそ病が長崎県で初確認された。

キュウリでは福岡、佐賀、宮崎県の冬春および促成・半促成キュウリで定植直後から褐斑病が多発し、宮崎県では特に発生面積率・程度とも高く11月8日付けで注意報が発表された。育苗期から定植時期にかけて平均気温は平年より高く、また降水量も多かったため本病の発病に好適な気象条件であった。

ピーマンでは宮崎県の冬春ピーマンで斑点病が多発し11月22日付けで注意報が発表され防除の徹底がなされた。育苗期から定植時期にかけての平均気温が平年より高く、また降水量も多かったため本病の発病に好適な気象条件

であった。

ネギでは大分県でべと病が多発し、3月30日付けで注意報が発表され防除の徹底が指導された。3月下旬の天候不順により発病が助長され3月下旬に根深ネギを中心に多発生した。

ダイズでは大分県において紫斑病が県下全域で多発生となった。9月上旬から中旬の降雨および収穫期の降雨が多発要因であるが、ベンズイミダゾール系薬剤に対する耐性菌も初めて確認され、発生程度の高い地域および圃場で耐性菌率が高い傾向がみられた。

3. 果樹

今年度は春先からの高温・小雨のため、全国的に病害の発生は低く抑えられた。

カンキツでは、各県とも4～5月に降水量が少なく適期防除が行われたことから、かいはよう病等の病害発生は全般的に少なかった。しかしながら、福岡県では枯れ枝除去等の管理不徹底や果実感染期の多雨により、黒点病がやや多となり、佐賀県では褐色腐敗病が9月中旬の風雨のために県西部および中央部の早生温州園でやや多、灰色かび病が多着花と満開期から一次落花期にかけての曇天によりやや多であった。このほか、熊本、沖縄両県ではそうか病がやや多であった。沖縄県では依然としてグリーンング病の発生拡大が問題であり、鹿児島県でも奄美群島への侵入が懸念されている。

ナシでは鹿児島県で黒星病が多発した。これは前年の多発により越冬菌密度が高かったため、梅雨期頃から発生が増加した。大分県では‘二十世紀’や‘新水’で、越冬枝病斑・罹病芽が多かったこと、ならびに発芽から幼果期にかけての防除不徹底により黒斑病がやや多であった。

ブドウでは、福岡県や佐賀県で露地栽培の‘巨峰’に晩腐病が多発し問題となった。本病はここ数年多発傾向にあり、特に本年は6月中下旬の多雨によって袋掛けがおくれたために発病が助長されたほか、ベンズイミダゾール系薬剤耐性菌の分布拡大の可能性も考えられる。防除効果の高い薬剤の探索と早期袋掛けの徹底が必要である。鹿児島、佐賀、福岡県では高い越冬菌密度、多雨、防除不徹底等が原因で、べと病がやや多～多であった。このほか、鹿児島県では褐斑病がやや多となり、大分県ではうどんこ病も発生初期防除の不徹底で多発した。

ビワは、長崎県で越冬病斑が多かったことにより灰斑病が葉で多、果実で平年並みの発生であった。また、佐賀県ではカキの落葉病が9月上旬から発生し、10月上旬に急増して10月末までやや多であった。

その他の果樹では特に目立った病害の発生はなかった。

4. 茶樹・花き・特用作物

茶樹では炭疽病が長崎および鹿児島県で多発生となった。昨年の秋目生育期から発生が多く、越冬菌密度が高く、梅雨期の高温多湿で発病に好適な条件となった。

花きではアザミウマ類で伝播されるTSWVによる各種ウイルス病の発生が拡大している。福岡県ではトルコギキョウ、キク、キャンディタフト、アスターで熊本県ではダリア、キクで継続して発生しており保毒虫のまん延が危惧される。家庭菜園の野菜や周辺雑草が感染源であり、園芸作物全般を対象にした地域全体での防除対策

が必要である。

サトウキビでは沖縄県で黒穂病が25年ぶりの多発生となり、本島の一部圃場では発病株率が45%、多良間村では53%の圃場もみられ、5月1日注意報が発表された。感受性品種の普及、放棄畑等からの汚染、抜き取り防除の不徹底等が原因と考えられる。鹿児島県では葉焼病の発生がやや多であったが発病程度は低かった。

（九州沖縄農業研究センター地域基盤研究部 中島 隆）
（果樹研究所カンキツ研究部 伊藤 伝）

〔害虫発生概況〕

1. 稲・麦

稲：海外飛来性イネウカ類の飛来時期はほぼ平年並みであり、主要な飛来がセジロウカでは6月～7月上旬に数波、トビイロウカでは6月3半旬、6半旬、7月上旬にみられた。セジロウカ、トビイロウカとも全体的な飛来量は少なめで、その後の発生も概して低く抑えられた。しかし、生育後期に宮崎県の一部の地域などでトビイロウカによる坪枯れが発生した。ウカ類の近年の少発生傾向は、フィプロニルやイミダクロプリドなどの長期残効性箱施薬が普及したことが一因である。ウカ類と同じように海外から飛来するコブノメイガも飛来量が少なく、全般的に少～並みの発生であった。

斑点米カメムシ類が全国的に大発生となり警報が7県で発令された。九州でも大分県で注意報が出された。最近の斑点米カメムシ類の多発傾向は、水稻の生産調整のため、雑草地や牧草など飼料作物の面積が増大したことに起因している。近年、主要な加害種として、本州ではアカヒゲホソミドリカスミカメ、九州ではアカスジカスミカメなどカスミカメ類が新たに加わった。これも牧草地の増加と関連があると考えられている。

飼料稲の栽培面積が増大した。これに伴い宮崎県や大分県では飼料稲にイチモンジセセリ、コブノメイガ、メイチュウ類の多発が報告された。長稈の飼料稲で多肥栽培が行われており、新たな害虫相の変化が懸念されている。また、ホールクロープ利用を前提とした飼料稲では、利用可能な農薬の整備も緊急課題である。

その他の稲害虫では、特筆すべきものはみられなかった。

麦：特筆すべき害虫はみられなかった。

2. 畑作物

大豆：ハスモンヨトウに関し、大分県や宮崎県では、当初、フェロモントラップ誘殺数が多く大発生が懸念された。8月下旬には大分県では注意報が発令された。しかし、その後の圃場における発生は全般的に少～並みであった。少発生の原因として佐賀県では、播種期の遅れと干ばつによる大豆の生育不良や8月下旬からの気温低下、9月の多雨などがあげられている。子実加害性のカメムシ類は全般に少～平年並みの発生であった。

サツマイモ：主要生産地の鹿児島県や宮崎県でナカジロシタバやイモキバガ、ハスモンヨトウなど主要害虫の発生は少～並みであった。

ジャガイモ：主要生産地の長崎県ではアブラムシ類が春作で多発した。その他の害虫は春作，秋作とも少～平年並みの発生であった。

3. 野菜・花き類

共通：トマトハモグリバエは九州全県に分布を広げた。発生が確認された品目はトマト，ナス，ソラマメ，インゲン，エンドウ，メロン，キュウリ，シュンギク，ニンジン等であった。メロン，キュウリでは被害が大きい傾向にあった（熊本県，大分県）。また，トマトでは，従来重要害虫であったマメハモグリバエの発生が少なくなり，トマトハモグリバエ主体の発生へ移り変わる傾向がみられる。キク，ガーベラでは，マメハモグリバエのみの発生が多いようであるが，花き類や小松菜等の葉菜類での発生は商品価値への直接的な影響が大きいので発生動向に警戒を要する。また，本種に有効な農薬の探索とその登録を急ぐ必要がある。一方，マメハモグリバエはソラマメ（鹿児島県）で多発する傾向が続いているが，全般に発生は落ち着く傾向にある。

オオタバコガは発生時期が早まる傾向がみられ，夏秋トマト（大分県）やトマト，花き類（熊本県）で多発した。ハスモンヨトウは，花き類（大分県），サトイモ（宮崎県），育苗期のイチゴ（長崎県），夏秋キュウリ（宮崎県）等夏秋期にかけて多発する傾向がここ2，3年続いている。また，イチゴ（本圃）では，晩秋期から初冬期まで発生が長引く傾向にある。

ナス科野菜：アザミウマ類，アブラムシ類，ハダニ類，コナジラミ類等害虫の発生は全般に落ち着いているが，鹿児島県の冬春ピーマンでアザミウマ類がやや多，熊本県の夏秋ナスでハダニ類とアザミウマ類がやや多，沖縄県の冬春ナスと冬春トマトでシルバーリーフコナジラミがやや多等地域によっては発生が多い傾向もみられた。また，トマト黄化葉巻病の発生は，媒介虫のシルバーリーフコナジラミに対する防除の徹底により減少傾向にあるが，局所的な発生が続いている。

ウリ科野菜：半促成スイカ（鹿児島県）とカボチャ（沖縄県）でアブラムシ類が，抑制カボチャ（鹿児島県）でシルバーリーフコナジラミがやや多発したが，アザミウマ類，アブラムシ類，コナジラミ類，ハダニ類の発生は全般に少ない傾向であった。

アブラナ科野菜：コナガやアブラムシ類等の害虫の発生は全般に少ない傾向が続いているが，本年はダイコン（鹿児島県）と夏秋キャベツ（熊本県）でコナガが多発傾向にあった。また，ダイコンサルハムシがダイコン（鹿児島県）で多発した。

イチゴ：ハダニ類とアブラムシ類の発生は，本圃では平年並みかやや少く問題はなかったが，親株床や育苗期にハダニ類がやや多い傾向が佐賀県や長崎県でみられた。

ネギ類：ネギハモグリとネギアザミウマが大分県でやや多かったが，特に目立った害虫の発生はなかった。

花き類：ツツジグンバイの発生は平年並みであった（福岡県，長崎県）。キクでは，アブラムシ類が沖縄県で，ハダニ類とアザミウマ類が鹿児島県でやや多かったが，特に目立った害虫の発生はなかった。

4. 果樹

共通：果樹カメムシ類は前年秋季の発生量が少なかったことから，越冬世代成虫の活動期にあたる5～7月は少発生であった。しかし，本年は主要な増殖源であるヒノキ，スギの球果量が多かったために，8月中旬以降の当年世代の発生が増加し，9月下旬に福岡，熊本県で注意報が発令された。各地域とも後半の多発により越冬量が增大すると予想されており，2002年前半の発生動向に十分な注意が必要である。

カンキツ：ミカンハダニは長崎県で6月と8月に多発に関する注意報が出された。また，熊本，鹿児島県でも後半に多発した。その要因として，4～5月の少雨が初期増殖に，7月下旬～8月中旬の少雨が後半の増殖に好適であったことが考えられる。ミカンサビダニはここ数年，各地で増加傾向にあり，カンキツの最重要害虫になりつつある。本年も，佐賀，熊本，大分，鹿児島県でやや多～多発生となった。前年の発生が多く，暖冬であったために越冬量が多くなり，4～6月が高温少雨のために増殖に好適になったと推測された。アブラムシ類は春の高温・少雨により佐賀県でやや多となった。ゴマダラカミキリが佐賀県で管理不良園を中心にやや多となった。ハウスミカンでは鹿児島県でネギアザミウマによる着色期の果実被害が問題となっている。

ナシ：ハダニ類が福岡，佐賀，長崎，鹿児島県でやや多～多の発生となった。ナシヒメシンクイが7～8月の少雨のために長崎，熊本県でやや多発した。アブラムシ類は佐賀，鹿児島県で春の少雨によりやや多となった。

モモ：主要害虫の発生は平年並みであった。

ブドウ：主要害虫の発生は平年並みであった。

カキ：カキノヘタムシガが福岡，佐賀県でやや多発した他は平年並みの発生であった。

熱帯果樹：鹿児島県でパッションフルーツを加害するナンセイハダニの発生が新たに確認された。沖縄県では，2000年に発見されたマンゴーの新葉を加害するマンゴーハフクレタマバエが，すでに県内各地に生息していることが明らかとなった。

5. 茶樹・特用作物

茶樹：鹿児島県や熊本県でクワシロカイガラムシの発生が多かった。その他の害虫はほぼ平年並みの発生であった。

サトウキビ：カンシャクシコメツキ類やメイチュウ類，ナガカメムシなど主要害虫の発生は平年並みであった。宮古島の一部地域で，イナゴ・バッタ類が多発生した。

（九州沖縄農業研究センター地域基盤研究部 和田 節）
（ 〃 野菜花き研究部 柏尾具俊）
（果樹研究所カンキツ研究部（口之津） 大平喜男）